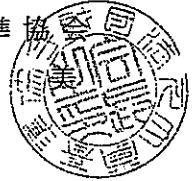


大基委大評第 146 号

平成 25 年 3 月 15 日

武庫川女子大学
学長 糸魚川 直祐 殿

公益財団法人 大学基準協
会長 納 谷 廣



貴大学の「改善報告書」の検討結果について (通知)

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。平素より格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。

標記に関し、本年度、貴大学よりご提出頂きました「改善報告書」を、大学評価委員会において慎重に審議を行いました結果、別紙の通りとりまとめましたので、ご通知いたします。

敬具

記

添付資料 「改善報告書検討結果 (武庫川女子大学)」

以上

〈 改善報告書検討結果（武庫川女子大学） 〉

[1] 概評

2008（平成 20）年度の本協会による大学評価に際し、問題点の指摘に関する助言として 11 点の改善報告を求めた。今回提出された改善報告書からは、これらの助言を真摯に受け止め、意欲的に改善に取り組んでいることが確認できる。

ただし、次に述べる取り組みの成果が十分に表れていない事項については、引き続き一層の努力が望まれる。

教育内容・方法については、1 年間に履修登録できる単位数の上限に関し、全学部において GPA と連動した CAP 制度が導入され、半期に履修登録できる単位数の上限を 25 単位以下と定めたが、依然として高いため、再検討が求められる。また、大学院研究科におけるファカルティ・ディベロップメント（FD）に関し、「大学院の振興・充実に関する検討委員会」において検討協議が続いているので、FD 活動実施に向けて改善が求められる。

学生の受け入れについては、文学研究科博士後期課程の収容定員に対する在籍学生数比率に関し、さまざまな努力により、若干改善されてきているが、2012（平成 24）年度の同比率は 0.22 と依然として低いので、今後も引き続き改善の努力が求められる。

研究環境については、研究活動が活発でない教員がいるという指摘に関し、研究促進のための啓発が行われた結果、科学研究費補助金の申請件数や採択件数も、若干増加している。科学研究費補助金をはじめとして競争的外部研究資金を獲得するためには、全学的な研究支援体制の構築が望ましい。また、生活環境学部の教員の担当授業時間数に偏りが見られるという指摘に関し、准教授については担当授業時間数の平均は減少しているものの、教授および講師についてはほとんど変化がなく、授業が最も多い教員の時間数が依然として多くなっているため、研究時間確保のための配慮を今後行うよう、改善が望まれる。

教員組織については、文学部および生活環境学部における教員 1 人あたりの学生数が多いという指摘に関し、生活環境学部食物栄養学科では若干の減少傾向が見られるものの、全体的にはより一層の改善に向けた努力が求められる。

[2] 今後の改善経過について再度報告を求める事項

なし

以上